た。尙母蜘蛛は白い脫殼を咥へること數分にして落すが，非常に痩てゐて——これから母蜘蛛は最初のやうに生活を繰返へすのである。脫皮の回數及び様子は次に申上げることにして，最後に鑑定をして下さいました植村利夫先生に厚く御禮申上げる。

オニグモ2種の報告

私は中學を出て東北帝大生物學教室に少しばかり居り現在仙臺鐵道局に勤務致しながら中學時代以來好きだつた蜘蛛の研究を續けて居る者である。去る9月7日家の近所を採集して數種を得，歸りに梅の木の側を通ると實にすばらしい丸網が張られて居る。何蜘蛛の住家だらうと其の網に近づいて見ると何處を見ても蜘蛛が居らない。居らないんだなと思つて網を强くゆすぶつて見た。其の時ウメノキゴケの如き塊が下に落ちたので何氣なくそれを注意して見ると落ちた塊が動き初めた。それで蜘蛛だといふことがはつきりとわかり早速採集し家に來てから調べて見ると正しく植村先生が Acta Arachnologica 第4巻第1號に本邦では朝鮮及本州中部以東で稀に採集せられる珍品であると書かれて居られたコケオニグモであつた。此の蜘蛛が宮城縣刈田郡地方に於て發見された事は特筆に値すると思ふのである。

我が國に於て樺太，北海道，本州北部及中部の高地に棲息して居るといはれるアカオニグモを宮城縣と山形縣に跨り聳ゆる藏王山の中腹早川牧場にて昨昭和15年8月と10月末頃に採集したのでアカオニグモは宮城縣にも居るといふことを報告して置きたい。齋藤博士は東北地方の蜘蛛類報告（1939年）に本種の產地として青森縣（青森市，弘前市，四和村？）を擧げて居られる。（平 間 富 夫）

東亞蜘蛛關係文獻目錄

第14輯（1941年度第3回）

18 加藤正世——石神井理科教材園自然觀察

昆蟲界第9巻第10號の全頁（pp. 493--612, 14 pls.）を潰して理科教材園自然觀察特輯號になさつたのは壯擧である。pp. 598—606 が蜘蛛類に關する解說で Plate 10 は「朝霧を宿した蜘蛛の網」Plate 11 は「黄金蜘蛛の雌雄」Plate 12 は「蜘蛛の親子」。石神井